受講生の体感的な理解を促進する英語科教育法
― 学習内容と関連した映像の視聴がもたらす効果 ―

田村　岳充

宇都宮大学共同教育学部研究紀要　第72号　別刷

2022年3月

受講生の体感的な理解を促進する英語科教育法
― 学習内容と関連した映像の視聴がもたらす効果 ―

Practice and Effects of Methodology of Teaching English Language that Promotes the Students' Perceived Understanding
― Effects of Watching Videos Related to the Learning Content ―

田村　岳充†
TAMURA Takamitsu

はじめに

本研究の目的は，本学共同教育学部「英語科教育法Ⅱ」の受講生（主に中・高等学校の英語教員免許状の取得を目指す３年次の学生）を対象としたWebアンケート調査を行い，小学校および中・高等学校教員養成外国語（英語）コア・カリキュラム*1」（東京学芸大学, 2017）が提案する授業実践力向上の観点から，授業で学ぶ内容と連動した「映像」（実際の英語授業の映像や児童・生徒のパフォーマンスの様子等）を視聴する機会を多く設けたことがどのような効果をもたらしたのかを捉えることである。調査は，2021年7月29日の「英語科教育法Ⅱ」の授業の最終回の授業の最後にGoogle FormによるWebアンケートによって行われた。集計の結果，調査に参加した31名の受講生全てが，「映像」の効果を感じ，授業に取り入れたことを好意的に捉えたことが分かった。また，その理由について尋ねる自由記述の設問への回答には「映像を視聴することによって教育実習で行う授業の具体的なイメージを持つことにつながった」，「授業で学習した内容や理論が実際の授業でどのように生かされているか分かった」「具体的なことが見えて不安が和らいだ」などのコメントが寄せられ，「映像」が受講生の体感的な理解を促進していることが示唆された，

キーワード：英語科教育法　　コア・カリキュラム　　授業・パフォーマンスの映像　　体感的理解

1．問題と目的

1．1 研究の背景

筆者は24年間中学校で勤務した経歴をもつ実務家教員である。中学校教員としての最後の勤務校は大学教育学部の附属中学校であり，勤務した９年間に多くの教育実習生を受け入れ，協働して英語授業を構想・実践・省察してきた。大学に籍を移して４年目となり，現在は教職大学院の専任教員となっているが，学部学生（主に中・高等学校の英語教員となることを目指して学ぶ学生），特に教育実習を行う３年次の学生を対象とした「英語科教育法Ⅱ・Ⅲ」*2の授業を担当している。このように，

†　宇都宮大学 共同教育学部（連絡先：tamuratakamitsu@cc.utsunomiya-u.ac.jp　田村岳充）

*1　コア・カリキュラムは，「コアカリキュラム」や「コア・カリキュラム」と表記される。本稿では，東京学芸大学（2017）に沿って，「コア・カリキュラム」という表記に統一している。
*2　2019年の教員免許法の改正を受け，新課程では「中等英語科指導法」という名称の授業が令和４年度に開講される予定となっているが，現在は旧課程による「英語科教育法」が開講されている。

教育実習生を迎える側と，送り出す側双方の経験を有していることから，学んだ理論を机上のものとせず，それらを教育実習で担当する授業で実践化できるようにしていくことの重要性をより強く認識しており，担当する授業では受講生の授業実践力の向上を図ることができるよう努めている。しかし，授業を行う上で常に悩むことは，半期15回の授業回数が大変限られているにもかかわらず，学ぶべき内容が多岐にわたっており（**表1**），それぞれを深く取り扱うことが難しいということである。

表1　2021年度前期「英語科教育法Ⅱ」シラバス

1	授業の目標と概要，評価方法の紹介，英語科教育法 Ia・b と本科目の学習について
2	到達目標，CAN-DO リスト，年間，単元，授業の指導計画・評価計画
3	授業のデザイン，指導計画立案，指導案の書き方
4	教材研究① Small Talk と Interaction
5	教材研究② コミュニケーション活動
6	教材研究③ 教科書の内容理解を中心とした授業に向けて
7	教材研究④ 学習形態の工夫，ALT との T-T，ICT の活用，教員の英語と日本語の使用
8	教材研究⑤ 発音指導，音読指導，ノート指導，板書，ワークシート
9	教材研究⑥ 即興性・流暢さの育成，パフォーマンステストとルーブリック評価
10	実地指導講師による指導 現場の実態を踏まえた講話及び演習
11	教材研究⑦ 自立的・自律的な学習者を育てる指導 宿題（課題）・辞書指導・多読・多聴指導
12	教材研究⑧ 帯活動，小・中・高の円滑な接続を考えた言語活動
13	指導案作成の具体① ねらい，題材観，指導方針，単元の指導計画との関連等を中心として
14	指導案作成の具体② 授業展開と評価を中心として
15	まとめと振り返り

上述のような課題を認識し，受講生による授業評価の結果も踏まえながら授業改善を行ってきたが，コロナ禍で学校現場を実際に訪問したり，教室で対面の授業を受けることすらも難しくなったりしている環境下であっても，受講生の学びを保証し，学んだ知識や理論が実際の授業でどのように生かされることになるのかを受講生が実感できるようにしていくことは不可欠である。そのために，具体的にどのような手立てを講じることができるかと考えたことが本研究の端緒となっている。

1．2 研究の意義

1．1で述べたような筆者個人の問題意識に留まらず，「英語科教育法」の授業改善を行うことは教員養成課程が抱える課題を克服することにつながるものでもある。2016年8月，中央教育審議会教育課程企画特別部会によって「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議まとめ」が発表され，その後2017年11月には教職課程コア・カリキュラムのあり方に関する検討会が「教職課程コア・カリキュラム」を発表した。外国語教育におけるコア・カリキュラムはこの文脈とは流れを異にして，2015年度に開始された「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」の取組に関わって作られたものである。2015年12月の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」において小学校での英語の教科化に向

けた対応の必要性が述べられ，大学・教育委員会も参画し，教員養成・教員研修に必要なコア・カリキュラムの開発と，大学での教職課程の改善・充実の取組に活用していくことが求められた。この答申を受け，文部科学省は「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」を東京学芸大学に委託した。教職課程を有する大学や教育委員会への質問紙調査，有識者への聞き取り調査，海外視察調査などの結果に基づいて，2016年3月，2017年3月に報告書が出され，**図1・2**のようなコア・カリキュラムが提案された。

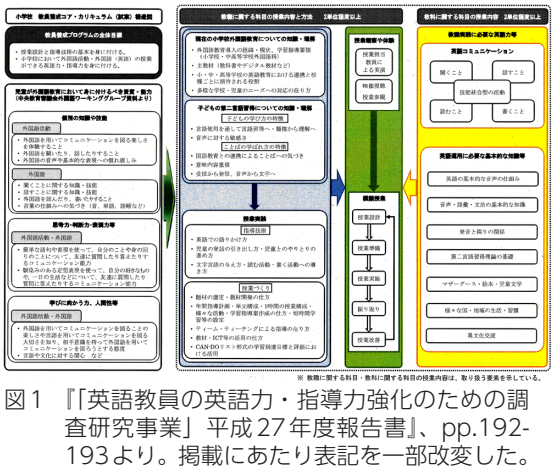

図1　『「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書』、pp.192-193より。掲載にあたり表記を一部改変した。

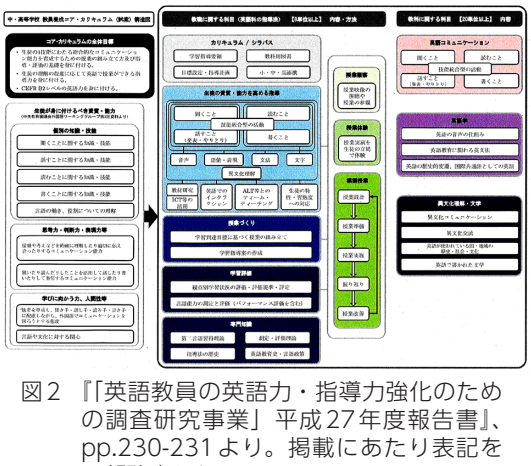

図2　『「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書』、pp.230-231より。掲載にあたり表記を一部改変した。

その後2019年に教員免許法が改正され，以降大学の教員養成課程では，コア･カリキュラムに沿った授業が展開され，これまで必修ではなかった小学校英語の指導についても理論的・実践的に学ぶこととなった。本学共同教育学部でも，1年次の学生を対象とする「小学校英語」，2年次の学生を対象とする「初等英語科指導法」を開講している。また，中・高等学校の英語教員免許の取得を目指す学生に向けた「英語科教育法」の授業においても，一層の授業実践力向上を目指したシラバスの改訂が行われ，授業が展開されている。

コア・カリキュラムは小学校，中・高等学校ともに，「外国語（英語）の指導法」と「外国語（英語）に関する専門的事項」の2つの柱から構成されており，教員養成段階で学ぶべき内容が整理されている。授業実践に必要な知識・技能を単に身に付けるだけに留まらず，それらを活用しながら授業実践につなげていくことも求められており，授業観察や教員による授業実演をもとに多くのモデルに触れつつ，模擬授業を行って実践力を高めていくことが理論上できるようになっている。

教員免許法改正を受け，再課程認定を受けた新たな教育課程が走り出して3年目となり，各大学の教員養成課程ではコア・カリキュラムの理念を具現化するための授業づくりの取り組みが行われているところである。本学共同教育学部でも同様の取り組みが行われており，コア・カリキュラムの理念がどの程度具現化されているのか，その成果と課題について捉えていくことには意義があると言える。

1．3　先行研究

コア・カリキュラムが示される以前の段階で行われていた大学の教職課程での授業について検討した先行研究には生田（2018）がある。生田は，A県B短大で開講されていた小学校外国語指導法に関

する授業群について批判的に検討した。生田によれば，当時，小学校教員養成課程における外国語指導法に関する国内共通のカリキュラムデザインが存在していなかったこともあり，オムニバスで行われていたＢ短大の小学校外国語指導法の授業は担当教員の裁量によるところが大きく，全体として一貫したものではなかったと述べている。生田は，コア・カリキュラムの提案以降，Ｂ短大において担当教員の協働による調整が行われ，より一貫性のあるシラバスへと改訂が行われたと報告しているが，このような状況はＢ短大のみならず各地で見られていたことが想像され，コア・カリキュラムが各大学による外国語指導法のシラバスや授業への反省を促し，授業デザインを見直す契機となったと言えるだろう。各大学がコア・カリキュラムをもとに取り組んだ外国語指導法の授業の見直しについて扱われている先行研究は複数存在する。澁井（2019）は，コア・カリキュラムが示す「授業観察」「授業体験」「模擬授業」の３つの形態を授業に取り入れていくことの重要性について述べている。自身が勤務する大学での授業実践にそれらを取り入れた効果を報告する一方で，「授業観察」については，学校現場に何度も出向いて十分に行うことは物理的に難しいため，授業映像を授業で視聴して学ぶ機会を設けたとしている。その場合，優れた授業の映像（適切なリソース）をどのように確保していくのかが課題であると指摘している。

宇野（2018）は，コア・カリキュラムが，教員の講義にとどまることなく，「授業観察」「授業体験」「模擬授業」の３つの形態を授業により一層取り入れ，教職課程における英語科教育法の授業がよりアクティブで実践的なものとしていくことが肝要であると述べている。宇野は，自身が勤務する大学の小さなスケールメリットを十分に生かし，少人数の受講生が協働的に関わり合いながら，これら３形態での学びを深めている様子について紹介している。受講生が少ないことのメリットとして，受講生全員に模擬授業を行う機会を保証できることを挙げている。他方，受講生が多い場合には，模擬授業を行っても授業者となれない学生も生まれることとなり，その場合の対応については十分検討を行う必要があるとしており，受講生数の多少によって，模擬授業の授業者となれる学生数も左右されてしまうことを示唆している。小柴（2021）は，コア・カリキュラムの策定段階で有識者や学会から寄せられた意見として，教員養成段階で行う授業内容に「授業担当教員による実演」「映像視聴・授業参観」「模擬授業」の３つの学習形態と通して指導技術を学ぶことの意義を踏まえ，自身が担当する初等英語科教育法の授業にそれら３つの学習形態を取り入れたシラバスを構成し，授業実践を行った。特に，オンライン上で繰り返し視聴ができる環境を作り，受講生に授業内外で映像の視聴を促した結果，大学２年生の受講生67名から，「英語授業のイメージができた。」「動画を視聴することができて役立った。」などの好意的な回答が寄せられた。小柴の報告から，「模擬授業」に望む前の段階で十分に実践のモデルとなる映像に触れる機会を確保することが，受講生の不安を和らげる効果をもたらすことが分かった。

平本（2021）は，外国語（英語）コア・カリキュラムに関する先行研究をレビューしている。特に，教員養成課程を有する大学の教職担当者によるコア・カリキュラムの評価を求め，比較的大規模な調査を行ったJACET関東支部特別研究プロジェクト（2019）の調査結果を中心に考察をした結果，「授業実践に必要な知識・理解」については比較的指導がしやすく，受講生の学習到達度も高くなる一方で，「授業実践」については指導の困難を感じている教員が多く，受講生の学習到達度も低くとどまる傾向があることが分かった。平本の指摘から，受講生だけでなく指導する側の教員が感じる問題があることも明らかになった。外国語指導法の授業を担当する側の教員が必ずしも小学校，中・高等学校で授業を行った経験があるとは言えず，そうした経験のない教員が受講生を前に授業実演をすることの難しさについても改めて考えていく必要があるだろう。

受講生である学生を対象とした調査を行っている先行研究には酒井・内野（2018）がある。酒井・内野は，小学校教諭免許状の取得を希望する中部地方の国立大学教育学部の初等英語科指導法基礎Aの受講生125名を対象に質問紙調査を行った。コア・カリキュラムが示す項目について回答者自身がどの程度身に付け，実行できるか，5件法での回答を求めたところ，全ての項目について3を下回る結果となり，受講生の自信のなさが浮かび上がった。その中でも英語力や英語に関する知識は比較的数値が高かった一方，授業づくりに関する項目や児童や学校の多様性への対応についての項目は数値が低くなる結果が出た。授業実践力とともに，個別最適化等，個への対応力など，実際の授業を行う際に活用される力についての受講生の不安が大きいことが示唆された。瀧沢（2019）は，コア・カリキュラムが示す，小学校教員および中・高等学校で英語教員となることを目指す大学生が教員養成段階で学ぶべき内容32項目について，大学生自身がどのように受け止めているか，その意識を捉えるため質問紙による調査を実施した。コア・カリキュラムは，試案の段階で大学教員および教育委員会指導主事からのフィードバックを得ており，教員養成･現職教員研修に当たる側からの受け止めと，コア・カリキュラムをもとに学ぶことになる学び手側の受け止めとを比較することも目的となっている。東海地方の国立大学教育学部の小学校外国語指導法の授業の受講生（3年次学生の履修が基本）204名を対象とした調査の結果，調査参加者が大学教員・教育委員会指導主事の回答と同様，全ての項目について役に立つと感じていることが分かった。特に役に立つと感じている5項目を双方の回答から抽出して比較すると，4項目については重なったが，**表2**が示すように，1項目相違が見られるものがあった。

表2　コア・カリキュラムの32項目のどの項目が役に立つと思うか　評価の高い項目
（瀧沢，2019をもとに筆者改訂）

順位	大学生	大学教員・指導主事
1	話すこと	話すこと
2	児童の発話の引き出し方･児童とのやり取りの進め方	聞くこと
3	聞くこと	児童の発話の引き出し方･児童とのやり取りの進め方
4	主教材（教科書やデジタル教材など）	模擬授業
5	授業担当教員による実演	主教材（教科書やデジタル教材など）

瀧沢はこの相違が生まれた理由について，模擬授業を学生が行うためには，実際に授業をどのように行うのか，また，指導の意図やねらいはどのようなものかを理解するため，授業担当教員による実演を受講生が求めているためだと分析している。その上で，自身が長く学校教育現場にいた経験も踏まえ，各学習項目と教壇に立って授業を行う際の実際とがどのように関連しているのかを実感できる授業作りの必要性を主張している。

ここまでコア・カリキュラムに関する先行研究を概観してきたが，コア・カリキュラムの提案後，現在までわずかな時間しか経過しておらず，各大学における外国語指導法の改訂と授業実践のPDCAが行われている最中であるため，多くの課題が見られる状況となっている。そのため，今後，より多くの実践とその効果の検証が積み重ねられ，改善が行われる必要がある。また，小学校外国語

指導法に関する先行研究は多く見られるものの，中・高等学校教員免許取得を目指す受講生向けに開講される「英語科教育法」の授業に関しての研究はわずかであり，それらを対象とした研究をさらに推進していく必要がある。

2. 研究課題

1で示した先行研究の課題を踏まえ，本研究のリサーチクエスチョンを，以下のように設定する。

(1) 中・高等学校の英語教員を目指す受講生を主な対象とした「英語科教育法Ⅱ」の授業に，毎回の授業の学習内容と関連した「授業観察（授業映像の視聴）」の機会を設けることによって，受講生の学習内容についての体感的な理解は促進されるか。

(2)「英語科教育法Ⅱ」の受講生は，授業における理論と実践について，どのようなバランスを求めているか。

3. 研究方法

3. 1　視聴した映像

「英語科教育法Ⅱ」の授業において使用した映像は，筆者が研修講師を担当している栃木県内の市町で参観した授業で撮影をした授業の映像，筆者自身が附属中学校で授業者として行った授業の映像，文部科学省の動画サイトチャンネルで公開されている授業映像などである。例えば，**表1**の「英語科教育法Ⅱ」のシラバスに示されている第4回のSmall Talk とInteractionであれば，授業の冒頭に授業者が行っている実際のSmall Talkの場面や，授業者とALT，また，授業者と生徒の英語によるやり取りの場面を視聴させた。児童・生徒のパフォーマンスの様子についても，栃木県内の小学校，中学校の児童・生徒の発表や，ALTとのインタビューテストの様子を収めた映像を視聴させた（いずれにおいても，授業者および授業者の在籍する学校の学校長の許可を得て映像を使用している）。90分の授業構成を考え，その他の学習内容も扱うことから概ね15分程度の視聴時間となるようにした。

3. 2　調査参加者

本研究の調査参加者は，本学部で2021年度前期に開講された「英語科教育法Ⅱ」の受講生33名のうち，調査に回答した31名である。受講生33名の所属分野（学科）を見ると，共同教育学部31名（英語分野20名，英語分野以外11名（保健体育分野・学校教育分野・特別支援教育分野）），国際学部国際学科2名である。また，受講生の学年は3年生29名，4年生4名となっている。

3. 3　調査時期とガイダンス

調査は2021年7月29日に行われた第15回の授業時間の最後に行われた。Google Formを使ったWebアンケート回答フォームへのリンクとなるQRコードを受講生に提示し，個々のスマートフォンからの回答を依頼した。回答に際して，無記名による調査で回答内容が成績には無関係であること，調査への参加は強制ではないこととともに，回答内容を授業改善と研究に活用することをガイダンスした（Webアンケートの冒頭にも，口頭で行ったガイダンスと同様の文章が記載されている）。33名の履修者のうち当日1名が欠席していたため，授業終了後，メールでの回答依頼を送信した。また，自宅のWi—Fi環境下での回答を希望する受講生には授業後の回答も認め，一週間の回答期間を与えた。最終的に33名の受講生のうち31名からの回答が得られた。

3．4　手続き

調査は，Google FormによるWebアンケートの形態を採った。調査には大きく3つのカテゴリーから構成されている。それぞれ，①その日の授業で学習した内容と関連のある映像を視聴する機会を設けたことについてどのように感じているか（とてもよかった，から全くよくなかったまでの5件法）と，選択した理由，②授業の中で視聴したいと思う映像はどのようなものか（複数選択可），③この授業で学ぶ，理論と実践のバランスについてどのように感じているかと，選択した理由，となっている（Webアンケートの内容は資料に示している）。

4．結果と考察

4．1　学習内容と関連した映像を視聴する機会があること

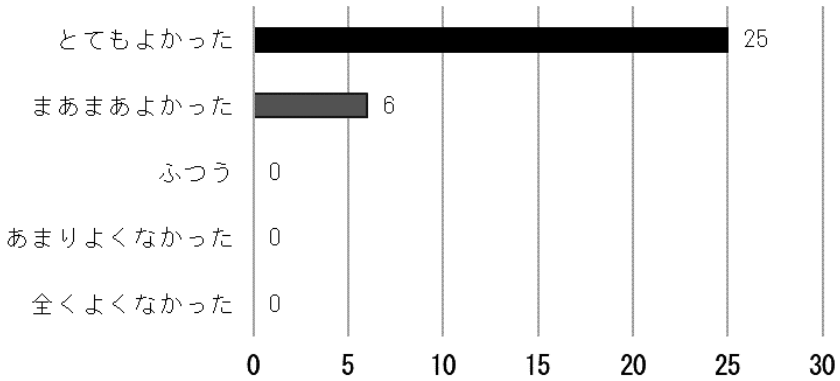

図3　学習内容と関連した映像を視聴する機会があることについてどう感じているか

図3が示すように，31名全てが好意的な回答をしている。中でも「とてもよかった」と回答したのは25名に上り，回答者全体の80%を超えている。以下，自由記述で寄せられたコメントのうち，主なものを示す。

- 机上で学ぶだけでなく，現場の実際を見ることで知識が深まったり，結びつけられたりすることがあるから。
- 今まであまり授業映像を見る機会がなかったため，この授業では映像を通して具体的にどのような教え方や授業をしているのか分かったから。
- 現場の先生の授業を見ることで，文面での内容と映像での内容をリンクさせて，理解が深まったから。
- 今まで技術や方法を口頭，文面で学ぶことはあっても，実際どのように子どもたちに作用しているのか，子どもたちはどんな様子でそれらを受け入れているのかがわからなかった。そのため，実際の様子を見ることで，どんなふうにその技術や方法を使えばいいのかの想像がしやすかったし，子どもたちがどんな反応を示しているのかがわかって不安が少し減った。
- 教育実習直前に，英語教育において深く考えることができたとともに，自分なりの考え方や意見をもつことができたため。
- 理論として学んだ内容が具体的な実践の場面でどのように使われているか知ることが出来，それによって理論に対する理解も深まったから。
- 教科書などを設んでいるだけでは分からない部分を，実践例に触れることで具体的にイメージを膨らませることができたから。
- 実践において大切なポイントを抽象的に理解するだけではなく，実際にどのように行われているのかを見ることができたので，より理解が深まったため。
- 内容を言葉で理解してもその生かし方までは想像しにくいことがあるが，映像を見れば実際に現場でどのように生かされているかを知ることができ，より内容の理解が深まるため。
- やはり授業のイメージだけでは追いつかないことも多くあるため，実際の授業を視聴しながら学ぶことができるのは非常に良かった。

自由記述による回答理由を見ていくと，映像が受講生の体感的な学習を促進し，学習内容をより深く理解することにつながっていることが分かる。また，具体的な指導の様子や児童・生徒の反応を見ることで，教育実習を控えた受講生の不安を和らげることにつながっていることが示唆されている。なお，改善を求める提案も寄せられた。具体的には，「視聴のするタイミングを授業の終わりに，ではなく中間に移し，視聴後のディスカッションをより充実させてほしい」というものであった。また，「映像視聴はよかったが，実際に教室に出向いて観察することにはかなわない」という意見もあった。

4．2　授業で視聴したいと思う映像

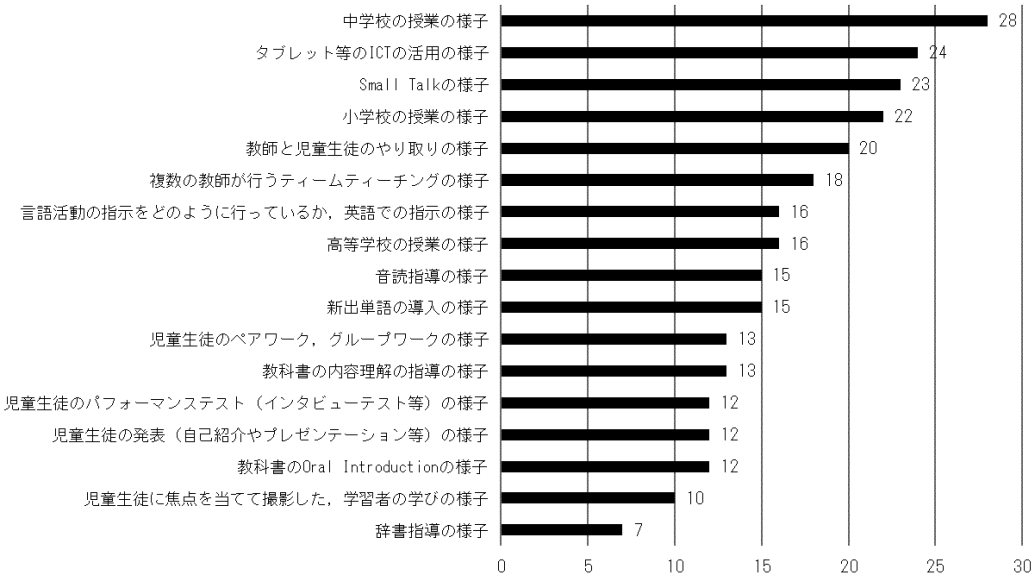

図４　授業で視聴したいと思う映像はどのようなものか（複数回答可）

図４は，調査参加者から寄せられた回答を回答数が多い順に並べ替えたものである。受講生によっての違いはあるが，小学校もしくは中学校での教育実習を控えており，それぞれの授業の様子の全体像をまずは視聴したい，という思いがあるのではないだろうか。中学校が小学校よりも回答数が多い理由として，本研究の対象となっている「英語科教育法Ⅱ」を受講する前の年度に「初等英語科指導法」での学習を終えており，そこで小学校の英語授業について学んできていることがあるのではないかと推察される。また，児童・生徒と英語を使ってやり取りを行う様子や，言語活動を行う際の英語による指示の出し方など，教育実習生として授業をどのように行っていくのかに直結するものが多く選択されていることも分かる。一方で，学習者の学びの様子や，パフォーマンスの様子などについての映像を選択した回答数が低く留まっており，教授側と学習者側のバランスを考慮しながら指導に当たっていく必要があると言えるだろう。

4．3　授業における理論と実践のバランスへの希望

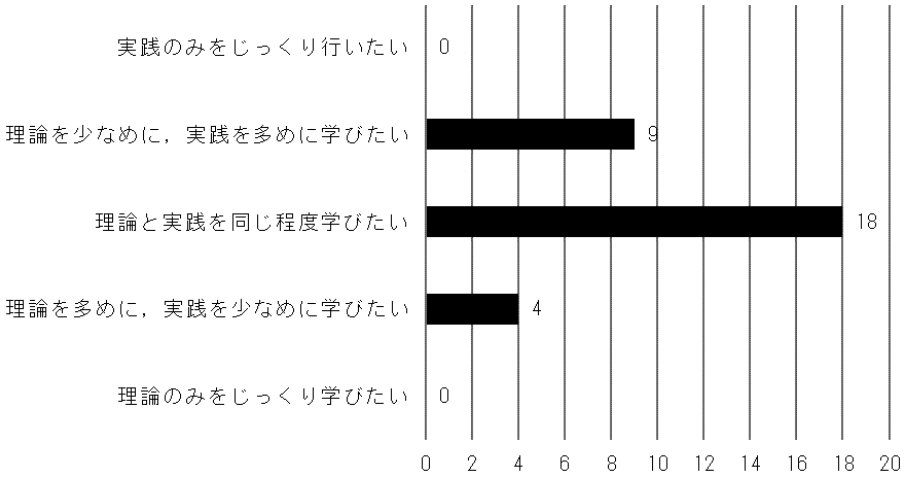

図５　授業における理論と実践のバランスへの希望

図５から受講生の多くが，理論と実践のバランスを取って学びたいと考えていることが分かる。また，どちらかと言えば実践を多めに学びたいとする回答も９件，およそ30％寄せられている。実践のみをじっくり行いたい，また，理論のみをじっくり学びたい，という回答はなかった。以下，自由記述で寄せられたコメントのうち，主なものを示す。

- 理論も大切であり学んでいきたいが，大学での学びを通し，総じて実践的な学習が少ないように感じるから。
- その後の教育去，実習，実践演習等で実践は行うため，この授業では，実践こ活かせる形での理論の教授に意味があったと思います。理論の教授の中に実際の映像の視聴，先生によるデモンストレーションがあったのは，その意味で重要だったのではないかと思います。
- 理論を学んだとしても，具体的にどうすればいいのかが分からないため，実践の方を多く学び，子供たちに対してどういうアプローチができるのかを考えるようにしていきたいから。
- 実践することで，どこがうまくいき，どこが失敗し，反省からどのようにまた改善をすることができるのか考えられるから。
- 現場径験が豊富である先生が授業者であるからこそ，現場での内容を本授業で詳しく学べる方が良いと感じた。
- 他の授業で具体的な指導技術や板書指導があまり学べないから。
- 理論だけであれば（極論を言えば）本や他の方去で事足りる。実際に教壇に立つ先生が，理論をどう受け止め，実践に活用しているのか。或いは他の先生の実践をどう理論の立場からどう分析するか，という点に対面で行う授業の意義を見出している。

自由記述による回答理由を見ていくと，「理論と実践は双方とも重要であるから」と言う回答が最も多く，14件寄せられた。それ以外の回答を見ると，「英語科教育法」の授業の流れの中で，他の授業と関連付けつつ，この授業ではどのようなバランスを取っていくべきか全体を俯瞰しながら考えている受講生の意見が見られたり，学習した内容を実践にどのように生かすのかを体得するためにも，実践のバランスを多くしていってほしいと考えている意見が見られたりした。

一方，理論を重視したい立場からの自由記述の意見は３件寄せられた。実践の機会は教育実習で十分得られるため，授業では理論を多く取り上げてほしい，というもの，また，模擬授業などの実践が大事だと思う一方，受講生数が多く模擬授業の授業者になれる学生は一部に限られてしまうなど，物理的な問題があるため実践を増やすためにも工夫・改善が必要だとする提案も見られた。

5. 総合考察

コア・カリキュラムが求める「授業観察」を実際に教室に出向いて行う観察と捉えると，附属学校を抱える本学部であっても，物理的な難しさは否めない。そこで，「授業観察」を「授業の映像を視聴する機会」と捉え，授業ごとの学習内容に関連した映像を適宜準備し，授業の最後に視聴させることにした（学習内容と直接関連する部分を編集で切り取り，授業時間を圧迫しないようにも心がけた）。Webアンケートへの回答の集計結果から，映像視聴について，全員が肯定的な回答をしており，教育実習を控え，学習した内容を実際の授業でどのように具現化し，実践するかのイメージを体感的に理解することにつながっていると言えるだろう。1．3で触れた先行研究の多くが，コア・カリキュラムの理念を小学校での指導法をベースに具現化した事例であるのに対し，本研究では中・高等学校での指導法をベースにしているが，「授業観察」のもたらす効果は同様に発揮されていると言えるだろう。半期15回の授業回数の少なさにもかかわらず，学ぶ内容が多岐にわたることによる困難については冒頭で述べた通りであるが，毎回の授業で行っている，Warming Upとしての受講生の英語力向上のためのSmall Talkや，教科書の購読，毎回の学習内容についての講義，また，その内容項目についての授業者による実演などと「授業観察」を併存させていることで，90分の授業構成が盛りだくさんとなってしまい，ディスカッションや省察の時間を取ることが難しくなっているという課題も生まれている。授業後，学外での自学で省察を深めさせることも可能ではあるが，やはり授業の中で扱うべきものをしっかりと保証していきたいと考えているため，今後は，内容を吟味・精選し，よりバランスの取れたものとしていく必要がある。特に，対面の授業だからこそできること，オンラインでも可能なこと，を十分留意しながら検討を進めていくようにしたい。

教育実習を控えた受講生は，実践をより多く求めているのではないか，という事前の予測を立てていたが，Webアンケートの結果，受講生の多くが，理論と実践をバランスよく同じ程度学びたいと考えていることが分かった。生田（2018）が指摘しているように，英語科教育法の下学年から上学年に至るまでの流れを改めて見つめ，「英語科教育法Ⅱ」で扱うべき理論面での学習内容を精査，吟味していかなければならない。実践の内容についても，本研究で焦点を当てた「授業観察（授業映像の視聴）」が適するものもあれば，「授業担当教員による実演）」が適するものもあるだろう。この点についても受講生の声も適宜取り入れながら検討をしていきたい。なお，先行研究が示しているように，「模擬授業」については，そのためのレディネスを受講生に十分保証することが肝要となる。そのため，「授業観察」「担当教員による実演」など，受講生にとってのモデルとなるものをできる限り与え，体感的な理解を促すことを忘れないようにしていきたい。このように，本研究の結果明らかになった課題を十分考慮しながら，受講生の体感的な学びを促進できる授業づくりに専心していきたい。

参考文献

[1] 生田和也，「外国語の指導力に関する学びと変容：コアカリキュラム案を踏まえた授業デザインと自己評価分析」，『鹿児島女子短期大学紀要』，54号，pp. 21-35（2017）

[2] 宇野光範，「英語科教育法におけるコアカリキュラムの適用」，『神戸親和女子大学　教職課程・実習支援センター研究年報』，（1），pp. 29-38（2018）

[3] 酒井英樹，内野駿介，「小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評価—小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から—」，*JES Journal*, 18, pp. 100-115（2018）

[4] 澁井とし子,「小学校外国語（英語）の教員養成コア・カリキュラム—押さえておきたいポイント—」,『マテシス・ウニウェルサリス』, 21 (1) , pp. 129-151 (2019)
[5] 瀧沢広人,「小学校外国語（英語）コアカリキュラム案に対する学生の意識調査」,『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』, 67 (2) , pp. 101-110 (2019)
[6] 東京学芸大学,「文部科学省委託事業　英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業　平成28年度報告書」,（http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html, 2021年9月26日閲覧）(2017)
[7] 文部科学省,「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」,（https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf, 2021年9月26日閲覧）(2017)
[8] 平本哲嗣,「小学校教員養成課程における外国語（英語）コアカリキュラム：安田女子大学における運用上の課題」,『安田女子大学紀要』, 49, pp.97-106 (2021)

令和3年10月1日受理

資料

英語科教育法Ⅱ　受講生アンケート

今年度の英語科教育法Ⅱの授業では，これまで以上に，授業で学ぶ内容と連動した「映像」（「小中で行われた実際の授業から，授業で学ぶ内容について扱っている場面を収めたもの」「児童・生徒のパフォーマンスの様子」等）を視聴する機会を多く設けてきました。そのことについてのWebアンケート調査を実施します。今後の授業の改善につなげるため，また，受講生のみなさんにとってよりよい学びを生み出す授業を作るために回答への協力をお願いします。

無記名による調査であり，回答を誰がしたのか等，個人の特定につながることは全くありません。また，回答は強制ではなく，回答内容によって成績への影響が起ることも全くありません（回答を送信したことをもって，アンケートの趣旨に賛同する，との意思表示となります）。安心して回答してください。それでは，どうぞよろしくお願い致します。

設問1. その日の授業で学ぶべき学習内容の具体が分かる小・中学校の英語授業の様子や，児童・生徒の英語学習の様子等を映した映像を見る機会を授業中に得られたことについてどのように感じていますか。

とてもよかった　　まあまあよかった　　ふつう　　あまりよくなかった　　全くよくなかった

設問2. 設問1の選択肢を選んだ理由について具体的に教えてください。

設問3.（複数回答可）授業の中で視聴したいと思う映像は，どのようなものですか。映像の種類について，当てはまるものを全て選んでください。

小学校の授業の様子
中学校の授業の様子
高等学校の授業の様子
複数の教師が行うティームティーチングの様子
児童・生徒に焦点を当てて撮影した，学習者の学びの様子
教師と児童・生徒のやり取りの様子
言語活動の指示をどのように行っているか，英語での指示の様子
Small Talkの様子
教科書のOral Introductionの様子
教科書の内容理解の指導の様子
児童・生徒のペアワーク，グループワークの様子
タブレット等のICTの活用の様子
児童・生徒の発表（自己紹介やプレゼンテーション等）の様子
新出単語の導入の様子
音読指導の様子
児童・生徒のパフォーマンステスト（インタビューテスト等）の様子

設問4. この授業で学ぶ，理論と実践についてのバランスについてどのように感じていますか（ここでの「理論」とは，第二言語習得理論や英語の指導法の理論等，「実践」とは，今年度のように，教科書の内容理解の授業展開，Small Talk や板書等，授業を行うために必要な具体的な指導技術等，を意味します）。

この授業では，理論のみをじっくり学びたい

この授業では，理論を多めに，実践を少なめに学びたい

この授業では，理論と実践を同じ程度学びたい

この授業では，理論を少なめに，実践を多めに学びたい

この授業では，実践のみをじっくり行いたい

設問5. 設問４の選択肢を選んだ理由について具体的に教えてください。

Practice and Effects of Methodology of Teaching English Language that Promotes the Students' Perceived Understanding
— Effects of Watching Videos Related to the Learning Content —

TAMURA Takamitsu